禅と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XVIII

臨済禅と接し、その精神性や美意識に感化されることにより、自分自身を高め偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思います。

鉄舟の剣

この項の冒頭に鉄舟は禅・剣・書において超一流であったと著しました。今回は鉄舟の剣について書きたいと思います。

弱冠21歳で講武所の世話役に抜擢された鉄舟は更に鍛錬を重ね技倆の向上に勤めておりましたが、なかなか鉄舟の眼鏡にかなう良い師匠にめぐり会う事ができずにいました。そんな中、浅利又七郎という人物と試合をする機会があり、その達人ぶりに感動した鉄舟は早速その門下生となって剣の修行にはげみました。

浅利との稽古は、毎回同じでした。道場で互いに木刀を持って対峙しますが、だんだんと浅利の気迫に押され鉄舟が壁まで追いやられます。その度中央へ戻ってやり直しますが、最後は縁側へおとされ終了となります。鉄舟は浅利に一度として勝てないままでした。

鉄舟は禅の修行にもはげんでいた事は先号にてお話しました。龍澤寺の星定和尚のもとで大悟した鉄舟は、その後も禅の修行を怠らず、その悟りをより深いものへと研ぎ澄ませていったのでした。

そんな中で、鉄舟は坐禅修行中に浅利の面影が眼前に立ちはだかり、のしかかる様に圧迫される様になりました。当時参禅していた天龍寺の滴水禅師に相談した所、「それは幽霊というものだ」といわれ、そんなものをはね飛ばす「衝天の気迫」を会得せよと命ぜられました。

それから3年、さらに修行を積み重ねた鉄舟は「絶対無」の心境を坐禅中に得たのでした。試しに浅利に対して試合する形を坐ったままやってみても昨日まで重くのしかかってきた浅利の幻影が現れてきません。これはという事で、門弟である籠手田安定を呼んで試合をしてみますと、ちょっと構えただけですぐに木刀を捨て「先生、ご勘弁願います」と叫んだのでした。「永年指導を受けてきたが今日の様な恐ろしい事は初めてで、とても立っていられない」とのこと、すぐに浅利を招いて試合をすると、鉄舟の気迫に押された浅利はすぐに「参った」と負けを認め、面をはずし、姿勢を正して「貴下はすでに剣の極致に達せられた。とうてい前日の比ではなく、私も遠く及びません」こういって鉄舟の境涯を認め、免許皆伝となったのでした。この時鉄舟は45歳、浅利の弟子となって17年の歳月が過ぎていました。

以下次号　（一峰　義紹）